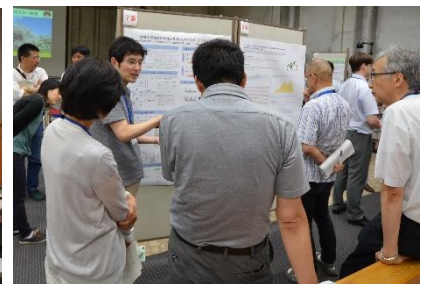


国立環境研究所（NIES）の災害環境研究の“いま”をお伝えします。

「福島支部交流セミナーinつくば」を開催しました

7月27日（木）の午後に、茨城県つくば市の国立環境研究所本部で「福島支部交流セミナーinつくば」を開催しました。福島支部より総勢18名のスタッフが参加し、支部の活動について報告するとともに、つくば本部の皆さんとの意見交換を実施してきました。つくば本部とはそれぞれの研究グループごとには綿密に情報交換しながら研究を進めていますが、福島支部の活動をまとめて紹介するという意味では初めての機会となりました。セミナーでは、昨年4月の福島支部発足からの出来事（研究、アウトリーチ、その他活動）を年表、写真、ニュースレター等から振り返りました。また、福島に関連する研究を進めている若手研究者を中心にポスター発表を行いました。さらに、「これからの災害環境研究」と題して、パネルディスカッションを実施し今後の中期的な研究の方向性や課題を議論しました。当日は理事長や理事を初めとして、満席に近い80名を超える参加があり、福島での研究成果や活動の経験を広く社会に発信し還元していくことに、非常に高い関心が集まっていることを改めて実感しました。また、タイミングよく互助会主催のビアパーティーも開かれていましたので、セミナーの後はそのまま多くのメンバーも参加しました。ちょこっと合唱団などの皆さんのステージとビールを満喫しながらつくば本部の方々と親睦を深めることができました。



パネルディスカッション

ポスター発表

最近の動向

- 6月** 国際科学雑誌Ambio電子版に、吉岡明良研究員らによる[水田消滅による里地里山の変貌を地図化—水域と陸域の違いを考慮した農地景観多様度指数の開発](#)が掲載されました（6/1）
復興庁関根参事官ら2名（6/7）、環境省小林次官（6/21）が視察に来られました
環境創造調査研究部門・特別セミナー「地域再生に向けて」が開催され、福島大学名誉教授・IGESシニアフェローの鈴木 浩先生をお迎えし「災害復興過程の地域コミュニティにおけるステークホルダー・コミュニケーション」について講演いただきました。福島支部からも、辻岳史准特別研究員、高木麻衣研究員及び戸川卓哉研究員が発表しました（6/29）
- 7月** 福島大学難波教授と学生のみなさま（7/11）、中間貯蔵・環境安全事業株式会社（JESCO）13名のみなさま（7/19）、環境放射能除染学会約40名のみなさま（7/21）が見学に来られました
[環境創造センター開所一周年記念イベント](#)が開催され、[たくさんの方に来ていただきました](#)（7/23）
[福島支部交流セミナーinつくば](#)を開催しました（7/27）



福島大学難波教授と学生のみなさまが見学に来られました



環境創造部門・特別セミナーではコメントをいただきました



一周年記念イベントではサイエンスカフェも開催しました



おしえて、しゅしゅが君！



管理課ってどんな仕事をしているの？

福島支部管理課 企画総務係 係長 丸尾武史

福島支部管理課とは

福島支部は研究を行うための組織ですが、研究室だけでなく、管理課という組織が設置されています。これは、つくば市にある本部と距離が離れているために、より近いところで研究活動を支え、また支部の運営全般を支える必要があることから、置かれているものです。



管理課の居室

管理課の仕事について

福島支部では現在 47 名が働いており、そのうち 12 名が管理課で働いています。管理課の役割は、「ヒト」、「モノ」、「カネ」をしっかり管理すること、そして「情報発信」を進めることです。それでは具体的な管理課の仕事を項目別にご紹介しましょう。

「ヒト」の管理：管理課には「企画総務係」という係があります。例えば、福島支部には多くの見学者が来ますが、この係ではその受け入れのための事務手続きや見学の様子の記録を行っています。また職員の健康面や安全面の管理をする人など、様々な役割を持った人たちがいます。

「モノ」の管理：これも「企画総務係」が行います。会議室や実験室、また機材や試料などを置くための保管庫など「部屋の管理」をおこないます。また、研究で使用する装置のほか、安全に研究活動を行うための装置、スカイプなどを利用してつくば本部との会議やセミナー等のための中継を行う機器など「備品の管理」をしています。施設にトラブルがあったときには、業者などと協力して対処します。

「カネ」の管理：「会計係」という係が管理しています。会計係は、福島支部での研究活動や運営に必要な契約業務などを担当しています。例えば、研究機器、研究試薬や事務用品などの発注、民間企業などへの業務委託などの契約関係、などの手続きを行っています。

「情報発信」：福島支部で行っている研究を一般の方に広く知ってもらうため、研究成果をまとめた「NIES レターふくしま」などの刊行物を定期的に発行し、HP で配信するお手伝いなどを行っています。



見学の様子



つくば本部とスカイプ中継

福島支部は開所してようやく一年が経つ若い組織です。環境創造センター研究棟が 2016 年 4 月に完成し、最初は管理課 4 人で立ち上げを進めました。次々と備品が納品されてきて、荷ほどき・組立て・設置の繰り返し、そしてゴミとなった段ボールや包装の山との格闘。並行して福島支部での様々なルール作りも行いました。それに加えて日々のメールチェックや事務作業もこなさなければならず、先の見えない日々…。ようやく本来の「係」の仕事に集中できるようになったのは、今年の秋ごろでした。

ここでの仕事には良いところがたくさんあります。例えば、福島支部自体がコンパクトな組織のため、メンバーの顔が身近に見られることです。管理課メンバーは「仲良し」というのが特長なのですが、それだけではなく、研究部門・管理部門が垣根を作らず、楽しく和気あいあいと、そして密に関係を持ちながら日々仕事を行うよう努めています。

組織を動かすとともに、研究活動がうまく進むよう、研究部門を下支えすること。つくば本部では分業となっているこの管理部門の役割を、一つの部署の中で体験できるのは管理課だけです。その意味で、福島支部は、国立環境研究所の組織体制の縮図のように感じています。これからも、福島支部を円滑に運営していくため、仕事に励んでいきます。

<こちらも参考に>

1. 国立環境研究所福島支部ページ（組織照会－管理課）
<http://www.nies.go.jp/fukushima/research-fukushima.html>
2. 国立環境研究所ニュース 36 巻 2 号
<https://www.nies.go.jp/kanko/news/index.html>



地域住民との連携によって開かれた生物モニタリングを目指す

生物・生態系環境研究センター/福島支部 深澤圭太

東日本大震災以降、避難指示区域とその周辺においては住民避難や帰還、除染などの復興に向けた人間活動により、地域の自然環境はめまぐるしく変化しています。このような状況のなかで、福島支部では長期的に生物の数や種類がどのように変化するのかを明らかにするために、2014年から避難指示区域内とその周辺を対象とした生物モニタリングを実施しています。また、原発事故に関する研究をするにあたっては、単に研究データを取るだけでなくその過程や得られたデータの透明性や利用のしやすさを確保することにより、研究者と社会との良好な関係を築く事が必要であり、そのための取り組みを実践しています。

バードデータチャレンジ: 地域と連携した鳥類モニタリングデータの取得

福島支部では、ほ乳類、鳥類、カエル類および昆虫類を対象に生物モニタリングを行っています。このうち鳥類については、避難指示区域内外の57カ所にICレコーダーを設置し、鳥の鳴き声を録音する調査を実施しています。したがって、出現した鳥類種のデータを得るためには、音声を聞いて種判別を行う必要がありますが、この過程の一部を市民参加型の公開イベント「バードデータチャレンジ」として実施することで、研究過程の透明性を高めることを試みています(図1)。このイベントは、福島県内の日本野鳥の会連携団体と共同で実施しており、今年度で3回目の開催になります。イベントにおいては、参加者がタブレット端末で音声の再生や種名の入力ができるWebアプリ「SONO-TORI」と、その入力結果を即座に地図上に表示できるシステム「SONO-TORI VIS」を用いることにより、参加者が種名を入力すると、すぐにその情報が視覚的に提供されるような工夫がされています(深澤ら 2017)。2017年のバードデータチャレンジは10月14日(土)に福島県西白河郡西郷村で開催します。

(<http://www.nies.go.jp/kikitori/contents/bdc.2017.html>)

皆様のご参加をお待ちしています。



図1 バードデータチャレンジの実施風景

データ公開と可視化の取り組み

野外で得られたデータに基づく研究は、統計解析の結果に基づいて起こったことやその原因について考察するというのが一般的な流れです。その際、第三者が同じデータと同じ手順で解析したときに同様の結果が得られるかどうか確認できることや、解析の際の仮定を変えたときに結論がどの程度変わるかを確認できることは、研究過程の信頼性確保と限られた視点からのデータの解釈による限界を明らかにする上で重要です。そのため研究に用いた一次データを公開することが重要になります。私たちはこれまでの生物モニタリングで得られた一次データを、論文の添付データ(Yoshioka et al. 2015)やデータペーパー(Fukasawa et al. 2016; Fukasawa et al. in press)という形で公開してきました。また、避難指示区域内外の生物相の変化を広く一般の方々にも知っていただけるよう、得られたデータを地図上に可視化したWebサイトを構築しました。哺乳類については、WebGISシステム「BioWM^{*1}」にて、鳥類については「KIKI-TORI MAP^{*2}」にてご覧いただくことができます。

*1: <http://www.nies.go.jp/biowm/contents/fukushima.php?lang=jp>

*2: <http://www.nies.go.jp/kikitori/contents/map/>

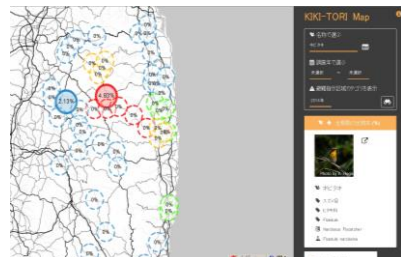


図2 KIKI-TORI MAPのインターフェース

<参考文献>

1. 深澤圭太, 三島啓雄, 熊田那央, 竹中明夫, 吉岡明良, 勝又聖乃, 羽賀淳, 久保雄広, 玉置雅紀 (2017) バードデータチャレンジ: 録音音声の種判別における野鳥愛好家・研究者協働の試みとその課題, Bird Research, 13, A15-A28.
2. Fukasawa, K., Mishima, Y., Yoshika, A., Kumada, N., Totsu, K., Osawa, T. (2016) Mammal assemblages recorded by camera traps inside and outside the evacuation zone of the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant accident. Ecological Research, 31(4), 493.
3. Fukasawa, K., Mishima, Y., Yoshika, A., Kumada, N., Totsu, K. (in press) Acoustic monitoring data of avian species inside and outside the evacuation zone of the Fukushima Daiichi power plant accident. Ecological Research.
4. Yoshioka, A., Mishima, Y., Fukasawa, K. (2015) Pollinators and other flying insects inside and outside the Fukushima evacuation zone. PLOS ONE, 10(11), e0140957.